

水と子ども



川上美子

はじめに

昭和四十九年四月、五歳男児Kは地域のM幼稚園に來た。年中組で一年間過ごし、翌年Kは就学猶予をし、そのまま年長組に持ち上った。私は二年目に、クラスの複数担任のひとりとして、保育に携わった。Kの幼稚園での一日は、ほとんど水遊びで終始した。当初保育者の指示には耳をかさず、数少ない集団活動にも無関心で、自分の思うまま、好きなままに活動していた。他の人に拒否されたり、活動を阻止されるとひどく乱れ、荒々しい行動となった。Kはこのように、まわりの人や物が自分の都合通りになつてゐる自分の狭い世界に住んでいた。私のKとの一年間の生活は、試行錯誤の連続であつた。私には、人が他の人にどれだけ深

くかわり得るかという問いでもあつた。その当時は、来る日も来る日も同じような水遊びに、どうか一時でも別の遊びに目を向けてくれないものかといふと試みたり、また思いかえしてKの水遊びの意味を探ねようと思つたりすることを繰り返した。その後四年を経て、記録を読み直してみると、Kの好んでした水遊びに、Kの成長の跡が刻まれていることが知られた。

以下、Kの水遊びに焦点を当て、「Kと子ども達の水のかかわり」さらに子どもにとつての水、砂遊びの意味を考えたい。

一、Kのひとり遊び

(記録)

四月のはじめの数日間、Kはほぼ一日中ひとりで黙って水

遊びをする。場所は、子ども達があまりこない砂場である。

Kは大きな洗剤の容器（以下、ポットと記す）を片手に持ち、その中に水道の水を入れる。そして別の入れ物に移しかえ、余りは下にこぼす。又砂を手に取り、上からポケットの水をかける。……

私は横にいてKのまねをしようとし、他の入れものに水を入れると、すぐKはそれを取って自分のポットに入れてしま

う。
Kはこのような活動を何度も繰り返し、没頭して遊んでいる。単調で閉鎖的な水遊びである。私もKと同様な活動をしようとするが、私のくんだ水はKに取られ、ポットに入れられてしまう。私は横にいて、Kと遊ぶというより、Kの思うままにされている感じがする。水も、Kの手によって移しかえられたり、砂を流したりする。私も水も、Kによって機械的に操作され、自由な動きは制約されている。

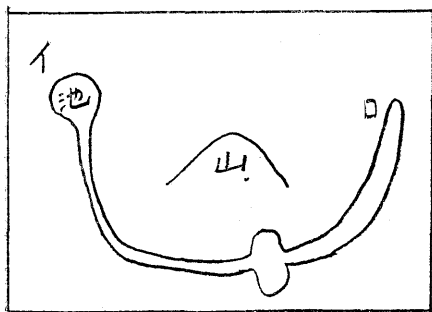
Kが水遊びをする時、常に用いる大きなポットは、いわば壺である。ユングは、「壺は、産み出し、あるいはすべてを呑み込むものとして、最も普遍的に太母神の象徴となっている。」と述べている。Kの心を捉えているこの容器は、自分を無条件に抱きか

かえてくれる母の象徴といえる。Kは人に対する関心は少ないけれども、この容器への並外れた愛着によって、自分を包みこんでくれる存在をむしろ欲していることが知られる。私は、これに対して、Kの水遊びにできる限りつき合い、彼の思いを受けとめるように努めた。

二、子ども達の所へ

（記録 四月十六日）

この頃になると、Kは日当りがよく、園庭の見通しもよい、子ども達が集まる砂場に来て水遊びをするようになる。私はクラスの子ども達と遊びながら、時おり園庭にいるKの所へ行く、Kの方も、私を目で追っている。Kは、前述の遊びの他に、砂場にできた水たまりにポットの水をドボドボとこぼす遊びをしている。



私は砂場に来て池を掘り始める。別の子ども達が作っていた水路と続ける。砂場は図(前頁参照)のようになる。Kは、イの池だけでなく、口のあたりまで、水道からポットにくんだ水を流す。他の子ども達もいつの間にかやって来て、水を注ぎ入れている。

Kは、子ども達のいる所、見える所に来て水遊びをするようになる。一の遊びのように、閉鎖的な場所です自分ひとりで遊ぶよりも、自分と同じように遊ぶ子どもがいる所を好むようになる。私が横で遊びを見ていると、Kは、「いつものようにするように」と言わんばかりに私の腕を動かして促す。また年中の子ども達もそばで水遊びをしていると、強引ではあるが、腕でその子どもを抱く。水遊びは、ひとりよりも仲間がいる方が、Kには楽しくなったのである。

記録の場面は、さほど活発に發展した遊びというのではない。しかし砂場は、山、池、川(水路)ができ、風景ができています。水も流れている。子ども達もしだいに加わって来て、子ども達も動いている。Kも広く砂場を動いて水を注いでいる。ひとり遊びの時には見られなかった動きである。水の方も、一のようにKに操作されるだけでなく、水自体で動いている。この場面は静かで

はあるが、生き生きとした自由感が漂っている。水、砂は子ども(人間)にとって不思議な力を持った物質である。精神分析では、水は無意識の象徴と言われている。水は、子どもの心の奥深い所に働いて、何かを呼びさまし、解放させる力を持っている。そして、この心の奥深い領域を共に持ち合うことによって、お互いの心が深い所で通じ合える。

私のかかわり方は、Kを含む子ども達の水砂遊びがおもしろく、持続するように心を配った。Kが保育者や子どものいる所で楽しく水遊びをすることは、Kを最も満足させ、自己の存在感を確かめ、さらには他の人との心のつながりを生むことになるのである。

三、子ども達に支えられて

五月に入ると、Kは心が乱れることがしばしばあった。Kの水遊びがうまくなり、つまり、愛用のポットが見当らない時、また雨で私が十分にKの水遊びにつき合えない時、また水遊びでトラブルが生じた時である。Kは日常生活においても、子どもに「ダメッ」と言われたり、たたかれるまねをされるだけでも気が持たず動転してしまふ。自分に好ましくない事態にぶつかると、すぐ自分の存在が脅かされる程の危機的状態になってしまう。自分で

気持をコントロールすることができず、たいてい私にその乱れた気持をぶつける。私は、Kを抱いたりおんぶしたりして、Kの気持が静まるのを待つより仕方がなかった。こういう事態が生じるのは、無理からぬ理由がある。以前の場合、自分の都合で動く世界にいたので、自分の思い通りに水や人を動かさせた。しかし、水遊び等で他の人と接するようになると、自分の都合だけで動く他の子どもと摩擦が生じるのは当然である。Kにとって、子ども達に混じって水遊びをすることは楽しい。しかしその所は、子ども達とぶつかり合う所でもあった。

Kがこうした事態を自分で処理し、乗り越えていくのは困難で、幾度も乱れることを繰り返した。こうした過程の中で、まわりの子ども達の支えは大きかった。

具体的には、(1)Kが幼稚園に来る前に、例のポットを二つ見つけて、「Kが喜ぶから」と言ってお水を入れて置いておく。(2)ポットが見当たらないと、先まわりして捜してくる。(3)他の子どもがポットを使っている、それをKがほしがると、話をつけてそのポットを譲ってもらう。(4)ホースを水道につないで他の子どもが遊んでいると、Kはホースをはなして水を使い、そのままにしておく。まわりの子ども達はホースをはずされるといやがる。それを知ったある子どもは、Kが水を使う度に、ホースをはずしてや

る。これらの行動は、子どもがKの気持を察知し、自分から自発的にした行動である。Kと子ども達がいろんなトラブルを起こしながらも、子ども達が共に育っていく姿は、保育者としてうれしいことだ。Kの方でも、クラスの子とも達に対し、以前のように強引なやり方ではなく、自分の顔を友だちに近づけて、やさしく親愛の情を表わすようになる。

四、友だちといっしょに

(記録 七月二日)

Kは朝来るとすぐ水遊びを始める。砂場のそばでは女兒達がおだんごを作っている。砂場では、男児達がカイジユウを使って遊んでいる。

男児M「Kちゃん」と呼ぶ。

K「はい、」と答える。

M「こっちに水入れてよ」

Kは言われた所に、ポットの水をポタポタと落とす。

子ども達が少なくなり、シャベルが三本散らばっている。

私はそれをシャベルかけに片付ける。するとKは、そのシャベルを取ってまた砂場のあたりに置く。

昔、まだ水道が各家庭になかった頃、川や井戸端には人々が集まり、などやかな交流があった。それと同様に、水のまわりで子ども達は、それぞれ遊びは違っていても、何か心の交流があるようだ。

この頃、クラスの子ども達はいろいろとKに声をかける。Kはしきりに「はいはい」とうれしそうに答える。記録の中で、Kがシャベルをあつた所へ置いたのは、友だちと遊んだ雰囲気、余韻を残しておきたかったからだ。Kはもうクラスの友だちに混じって遊んでいる。

五、困難を乗り越えて

(記録 七月四日)

どうしても愛用の容器(この頃はむしろ小型の容器を好む)が見当らない。Kはしだいに乱れていく。私と二人の男児は捜すがない。

私はKをしばらくおんぶすると、気持ち少し落ち着く。そして、雨が降っているのを見たり、雨だれを手で触れたりしていると、気持ちが収まる。

まもなくお弁当の時間になる。Kは私の体にピッタリくっついて食べる。また自分のお弁当やお茶を、私に食べさせ、

飲ませる。

大きさは小型になったものの、愛用のポットがないという事は、Kにとり自分を母親のように完全に受け入れてくれる存在がないということである。今までであると、ポットがないとひどく乱れたものであった。しかしこの日はじめて、この困難な事態を乗り越えることができた。Kは、容器がないという事実を受け止めることができるようになったのか。愛用の容器がなくてもすむようになったのか。

私は、徐々に落ち着いていくKをおんぶしながら、物に受容されるのではなく、私(人)に自分を委ねていくKを感じた。その後お弁当の時、Kは自分の食べ物や飲み物を私の口に入れる。これは、Kがポットに水を注ぎ入れる活動と同様のものである。つまり、私は自分を受け入れてくれる人として位置づいているのである。その後、私に甘えることもあり、私の名前も口ばしすることがあり始めた。何がなんでもという固さが和らぎ、Kはほがらかになった。水遊びも鼻歌まじりでする。家でも、幼稚園のおかえりの歌を口ずさむようになった。まわりの子ども達も、Kがにこやかな時は特に、ことはをかけたたり、Kとふざけ合ったりする。

ポットにしがみついて水遊びをし、自分の思い通りになる世界

にいた時は、他の人は無関心か、あるいは自分を脅かす恐怖の対象であった。ところが水遊びを通して、他の人と遊ぶ楽しさを知った。しかしそれは、今まで気づかなかった他(人)の世界との直面であり、その世界との摩擦を余儀なくした。言い換えれば、この摩擦によって、自分とは違う、自分の思い通りにはいかない、他の世界を知ったといえる。そして、今まで述べてきたように、Kの心を捕えている水遊びを、友だちや保育者に混じってすることで、Kは他の世界をKなりに認識していく。自分にとって快、不快によって事態を判断することが少なくなる。また、他の世界は、単に自分に危害を加えるものではないという認識によって、Kは新しい出来事や人に対する極度の恐怖心は和らいだ。Kが愛用の容器がなくてもすんだという背景には、こうしたKの心の変化の過程があるのである。

六、水に入る

(記録)

Kがはじめて水の中に足を入れたのは六月十九日であった。この日砂場は水びたしになり、大勢の子どもが中に入り、私も入った。するとKも泥水の中に入り、足を動かし、見ていた。六月の下旬からプールが始まった。私はKを抱い

て入る。はじめKは少しこわがるが、しだいに慣れていく。友だちのしぶきがかかるといやがり、私にしがみつく。しかし、プールの中でとびはね、ごきげんである。

ここでのKの水とのかかわり方は、四月の頃、黙ってあまり動かずに水を操作していたのと全く違うものである。Kは体全体水に漬かって、水を感じている。体を解放して、水に委ねている。つまり、自分の捉えうる範囲で世界と一方的に接触しているのではなく、その枠をはずして世界と交流している。この事は、Kの世界(自然)に対する見方、処し方で、画期的な出来事である。

おわりに

この幼稚園は、子どもが自由に遊ぶことができる幼稚園である。Kはここで、幼稚園生活の大部分を水遊びで過ごした。Kに限らず水遊びは、多くの子ども達が好む遊びである。水、水遊びの子どもにとっての意味は、測り知れなく大きい。私は、ひとりの子どもが水遊びをめぐって、保育者や子どもとさまざまな出来事に出会いながら成長していく姿を、捉えることができた。

(日本総合愛育研究所)

* 河合隼雄著『ユング心理学入門』(培風館)九二ページ。